

森山倭成（神戸大学人文学研究科博士前期課程）

1. 序論

昨今の項削除分析では、Saito (2007) に端を発する反一致仮説 (Anti-agreement hypothesis) を契機として、言語間の変異を捉えるための議論が盛んになってきている。その中核を成すのは ϕ 素性の一致の有無である。一方、 ϕ 素性以外的一致について反一致仮説の立場から詳細に検討した文献はそう多くない。また、Oku (1998) 以来、非常に多くの文献で LF コピー分析 (Williams 1977) が採用されてきたが、PF 削除との決着がついたわけではない。これらの点を踏まえ、本分析では、 ϕ 素性の一致ではない一致現象に着目しつつ、LF コピーの妥当性について議論する。

本分析の主張は次の二点に集約される。まず、「だけ」の項削除を考察することにより、LF コピーの問題点を指摘し、PF 削除の優位性を主張する。次に、「だけ」が一致操作によって認可されることを仮定し、反一致仮説を支持する形で、「だけ」を含む項の削除現象を説明する。

- (1) PF 削除の優位性 (Sag 1976, Merchant 2001 など)
- (2) 反一致仮説 (Ikawa 2013, 2014, Saito 2007, Takahashi 2014 など)

なお、ここで扱う取り立て詞「だけ」は限定の用法に限ることとし、程度を表す用法は考慮しない。

- (3) a. 太郎は LGB だけを読んだ。(限定)
- b. 太郎はやれるだけのことはやった。(程度) (cf. 宮島・仁田 1995)

2. 限定を表す「だけ」

取り立て詞「だけ」の含まれる項が削除される際、取り立て詞の読み (取り立て詞解釈) は出にくいことが知られている (Funakoshi 2012, Oku 2016)。対して、限定の意味を除いた解釈、すなわち「花子も LGB を読んだ」という読み (非取り立て詞解釈) が可能であることについてはあまり議論されていない。この文に続けて「彼女は Barriers も読んだよ」などと発話できることから非取り立て詞解釈の存在が確認される^注。[e]は省略箇所を表す。

- (4) 太郎は [DP LGB だけを] 読んだ。花子も [e] 読んだ。(??取り立て詞解釈/OK 非取り立て詞解釈)

これは名詞句の項に限ったことではない。項としての前置詞句や補文が削除される場合も取り立て詞解釈は厳しく、一方の非取り立て詞解釈のみ許される。

- (5) 花子は [PP {太郎だけから/太郎からだけ}] 花束をもらった。順子は [e] 指輪をもらった。
- (6) 太郎は [CP 花子が LGB を読んだとだけ] 言った。次郎も [e] 言った。

これらのデータは空代名詞 *pro* によっては捉えられない。*pro* では削除現象に典型的なスロッピー解釈を説明することができないためだ。(7)の二文目には「花子も太郎の本を読んだ」という解釈 (ストリクト解釈) と「花子も自分 (=花子) の本を読んだ」という解釈 (スロッピー解釈) の二つが可能である。このような事情から項削除の立場を採る。

- (7) 太郎は自分の本だけを読んだ。花子も [e] 読んだ。(OK ストリクト解釈/OK スロッピー解釈)
- (8) 太郎は自分の本だけを読んだ。花子も {*pro*/それを} 読んだ。(OK ストリクト解釈/*スロッピー解釈)

3. PF 削除の優位性

前節で見たデータは LF コピー分析にとって問題となる。Oku (1998) に続く非常に多くの文献でこの立場が採用されてきた。LF コピーによれば、先行詞の情報が LF において省略箇所コピーされる。

(9) 太郎は [DP LGB だけを] 読んだ。花子も [e] 読んだ。



LF コピー

この操作が正しいのだとすると、「LGB だけを」が LF でコピーされることになるから、予測としては取り立て詞解釈が可能となり、さらに非取り立て詞解釈は不可能となるはずである。しかし、すでに見たように、事実はそれとは逆である。他方、PF 削除自体が（非）取り立て詞解釈を許したり禁止したりするわけではないから特に問題はない。したがって、PF 削除と LF コピーの二分法を前提とした場合、PF 削除の方が好ましいと考えられる。

本論では考察の対象とはしないが、「だけ」に限らずその他の多くの取り立て詞についても取り立て詞解釈が難しいと判断される。

(10) 太郎は [DP LGB{さえ/も/こそ/だって}] 読んだ。花子も [e] 読んだ。

(?取り立て詞解釈/OK 非取り立て詞解釈)

この事実が正しいければ、「だけ」以外の多くの取り立て詞に関しても、LF コピーに対する問題点を指摘することになるだろう。

4. 一致現象

4.1. 反一致仮説

Saito (2007) 以来、項削除の認可に関して通言語的な制約が働いていることが提案されている。反一致仮説 (Anti-agreement hypothesis) と呼ばれるものである。簡略に述べれば、一致関係にあるものは削除できない場合があるという趣旨の仮説である。これにより、例えば、日本語で項削除が許され、英語では許されない理由について説明を与えることができる。まず日本語については、 ϕ 素性の一致がない (Kuroda 1988) と仮定することによって、日本語では反一致条件による制約がかからないことになり、結果として項削除が許される。一方、英語では義務的な ϕ 素性の一致が課されるため、反一致条件により項削除が禁止される。

反一致仮説を巡っては、 ϕ 素性の一致に関わる議論が中心となっており、その他の一致に関してはあまり議論されていない。 ϕ 素性の一致以外に着目した数少ない文献には Ikawa (2013, 2014) がある。Ikawa (2013, 2014) では、疑問詞や存在量化「誰か」などの項削除が扱われている。(11)に示すように、wh 疑問詞は削除不可能である。

(11) a. 太郎は どの本を 読んだの？花子は [e] 読んだの？

(*wh 疑問文解釈)

<wh> <Q>

b. 太郎は 花子が何を read だど 思っているの？次郎は [e] 思っているの？

(*wh 疑問文解釈)

<wh> <Q>

(cf. Tanaka 2008)

他方、存在量化詞は削除可能である。Ikawa (2013, 2014)では不定代名詞「誰」が「か」によって認

可されると仮定されている。

(12) 太郎は

誰	かを
<Ex>	<Q>

 愛している。花子も [e] 愛している。

Ikawa (2013, 2014) はこの事実を LF コピーの立場から説明しているが、本論では PF 削除を採るため、Saito (2007) のデータと合わせてあくまで次のような定式化の形で受け入れることにする。

(13) Saito (2007), Ikawa (2013, 2014) に基づく定式化 (本論で言う反一致仮説) : 一致関係にあるものが省略されるとき、省略箇所は一致関係にある要素を両方とも含んでいなければならない。

例を挙げると、(11)が wh 疑問文解釈を許さないのは、一致関係に関わる要素のうち省略箇所には <wh>しか含まれないためである。(12)では、省略箇所に <Ex>と <Q>の両方の要素が含まれるため、存在量化の解釈が生じる。これが正しいとすると、次のような事実も捉えることができる。

(14) 太郎は

花子が何を	読んだか
<wh>	<Q>

 知っている。次郎は [e] 知らない。 (OKwh 疑問文解釈)

(14)のように、省略される補文の内部に <wh>と <Q>両方を含む場合、wh 疑問文の解釈が生じる。言い換えると、疑問詞は常に削除不可能というわけではないと言える。

4.2. 一致による「だけ」の認可

「だけ」の項削除は、この取り立て詞が一致関係によって認可される (cf. Aoyagi 1998) と仮定することによってうまく捉えられる。一致が起きるということは、そのための投射が必要であるため、まずは投射の位置を決定しなければならない。

Murasugi (1991) に従って、日本語の関係節は TP まで投射されていると仮定しよう。(15)より、「だけ」は関係節内に生起可能であるから、「だけ」の投射が存在するのだとすれば、その位置は TP 以下ということになる。

(15) 太郎は [TP LGB だけを読んだ] 女性を探している。

また、Hasegawa (1994), Tanaka (1997), 田中 (2016) の交差制約により、「だけ」を認可する投射は NegP より上部だと推定することができる。交差制約とは、概略、呼応関係にある要素を線で結んだ際に異なる関係同士が交差してはならないというものである。(16)b の非文法性は交差制約により説明される。

(16) a. 誰が LGB しか読まなかったの? (入れ子型)

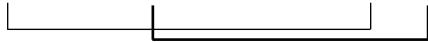
b. ??LGB しか_i 誰が t_i 読まなかったの? (交差型)

交差制約は階層の反映であると考えられている。(16)a が文法的であるのは、疑問詞に関する投射が「しか」に関わる投射 NegP よりも上部にあることの反映である。これを「だけ」に当てはめると次の結果となる。

(17) a. 太郎だけが LGB しか読まなかった。(入れ子型)



b. ??LGB しか_i 太郎だけが t_i 読まなかった。(交差型)



(17)a が入れ子型になっているから、「だけ」の投射は NegP よりも高い位置にあると考えられる。これらの事実から、厳密な認可位置は確認できないものの（後の議論に支障が生じることはないため）概ね TP から NegP の間で「だけ」が認可されると仮定する。ここまでの道具立てを用いて次項では取り立て詞解釈と非取り立て詞解釈の派生を提案する。

4.3. 「だけ」の項削除

「だけ」の認可を一致に還元することで、取り立て詞解釈が許されないという事実を説明することが出来る。以下では、一致関係にある要素を便宜上 <dake>、<foc> と表している。省略箇所内部を見ると、いずれも <dake> のみが含まれており、(13) で見た定式化に反する。したがって、取り立て詞解釈は許されない。

(18) 太郎は

[_{DP} LGB だけを]
<dake>

 読んだ。花子も [e] 読んだ。
<foc>

(19) 花子は

[_{PP} {太郎だけから/太郎からだけ}]
<dake>

 花束をもらった。順子は [e] 指輪をもらった。
<dake> <foc>

(20) 太郎は

[_{CP} 花子が LGB を読んだとだけ]
<dake>

 言った。次郎も [e] 言った。
<foc>

次に、(21)、(22)の例には取り立て詞解釈があるが、これは省略箇所にも <dake>、<foc> 両方の要素が含まれるためである。これらの事実は、前項までに見た疑問詞や存在量化の項削除と平行に説明することが可能だ。

(21) 太郎は

[_{CP} 花子が LGB だけを読んだと]
<dake> <foc>

 思っている。次郎も [e] 思っている。

(22) 太郎は

[_{CP} 花子が LGB だけを読んだか]
<dake> <foc>

 知っている。次郎も [e] 知っている。

続いて、非取り立て詞解釈の派生について議論する。Saito (2007) らに基づく定式化によれば、一致に関わる要素が省略される場合に一定の制約がかかるということであった。日本語で一般に項削除が許されるのは、そもそも φ 素性の一致が存在しないためである。つまり、一致操作さえ回避することが出来れば定式化によって制御されることはないと言える。そこで、非取り立て詞解釈の派生の際に、省略箇所は次のような形をとると仮定する。取り消し線は省略箇所を表す。

(23) 太郎は LGB だけを読んだ。花子も [_{DP} ~~LGB~~を] 読んだ。

(24) 花子は [_{PP} {太郎だけから/太郎からだけ}] 花束をもらった。順子は [_{PP} ~~太郎から~~] 指輪をもらった。

(25) 太郎は [_{CP} 花子が LGB を読んだとだけ] 言った。次郎も [_{CP} ~~花子が LGB を読んだと~~] 言った。

いずれも非取り立て詞解釈を許すデータである。省略箇所を見ると、その内部に「だけ」を含まないが、残りは先行詞と同一である。このようにすれば、反一致仮説に違反することなく、非取り立て詞解釈を捉えることができるだろう。

本節を終える前に、再度 wh 疑問詞の削除に立ち返りたい。(26)に再掲するデータには wh 疑問文解釈がないとのことだった。しかし、この文には yes-no 疑問文解釈ならばある (Oku 2016)。この解釈は非取り立て詞解釈と同じ派生によって説明することができる。(26)b に示すように、省略箇所には疑問詞の要素が含まれない。

(26) a. 太郎は どの本を 読んだの？ 花子は [e] 読んだの？ (*wh 疑問文解釈/OKyes-no 疑問文解釈)
<wh> <Q>

b. 太郎はどの本を読んだの？ 花子は [~~本を~~] 読んだの？

この場合も Saito (2007) らに基づく定式化に反することなく yes-no 疑問文解釈を派生することができる。

5. 本分析の課題

本分析には大きく二点の課題がある。i) 非取り立て詞解釈派生時の (意味的・統語的) 同一性の問題、 ii) Saito (2007) らに基づく定式化を PF 削除のもとでどう引き出すかの二点である。

まず、同一性の問題については様々な文献で議論されている (Merchant 2001 など)。

(27) 太郎は LGB だけを読んだ。花子も [DP ~~LGB~~を] 読んだ。

本分析では、非取り立て詞解釈を派生するにあたり、上の様な構造を想定した。しかしながら、これが省略で必要とされる同一性を満たしているのかは疑問である。少なくとも、先行詞には「だけ」が含まれ、省略箇所にはそれがいないため、「限定」の意に関する意味的な同一性は保たれない。一方で、統語的同一性については先行詞も省略箇所も名詞句 (DP) であるという点では同一と言えるが、やはりその内部にある「だけ」の有無に関しては統語的に同一とは言えない。

この問題は、日本語における省略の同一性を考察する際にも重要になる。現時点では、日本語における省略の同一性の性格が十分に明らかになっているわけではないため、今後の課題とする。

続いて、Saito (2007) らに基づく定式化の出どころに関する議論が PF 削除にとって肝要である。再掲の定式化は、Saito (2007) では LF コピーのもとで説明されていた。

(28) Saito (2007), Ikawa (2013, 2014) に基づく定式化：一致関係にあるものが省略される時、省略箇所は一致関係にある要素を両方とも含んでいなければならない。

これを PF 削除自体から出すか、これまでに知られていない省略の性質によって説明するかどうかについては慎重な議論が要される。もし PF 削除から出すのであれば、何らかの形で (音韻素性の削除だけでなく) 形式素性による一致をも妨げるようなメカニズムを提供する必要がある、これについても今後の課題とする。

6. まとめ

本論では、「だけ」を含む項の削除現象に注目し、i) PF 削除及び ii) 反一致仮説を支持した。「だけ」が一致によって認可されると仮定すると、取り立て詞解釈は反一致仮説のもとで禁止されることになる。一方の非取り立て詞解釈は反一致仮説に違反する形をとらないため可能である。また、LF コピーの派生は「だけ」の解釈を巡って事実とは反対の予測をする。本分析は、 ϕ 素性の一致とは異なる一致現象に着目しているという点において、経験的データの拡張と反一致仮説に係る理論構築に寄与する可能性がある。

注 非取り立て詞解釈の存在については、WAFL13 (2017年5月、於 国際基督教大学) で指摘を行った。ただし、そこでは本論とは本質的に異なる分析を提案している。

謝辞

内容に関して、田中秀和先生、岸本秀樹先生、坂本祐太先生から大変有益な御意見を賜った。また勉強会等を通じて、前田晃寿氏、山口貴也氏、木戸康人氏、水谷謙太氏、山口真史氏、中西亮太氏、平山裕人氏からも数多くのコメントや御助言を頂いた。ここに記して感謝申し上げる。

参考文献

- Aoyagi, Hiroshi. 1998. *On the nature of particles in Japanese and its theoretical implications*. Doctoral dissertation, University of Southern California, Los Angeles.
- Funakoshi, Kenshi. 2012. On headless XP-movement/ellipsis. *Linguistic Inquiry* 43:519–562.
- Hasegawa, Nobuko. 1994. Economy of Derivation and A'-Movement in Japanese. In M. Nakamura (ed.), *Current Topics in English and Japanese*, pp. 1–25. Hituzi Publishers.
- Ikawa, Hajime. 2013. What the ineligibility of wh-phrases for argument ellipsis tell us: On the inertness of phonetically null elements. In *Online Proceedings of GLOW in Asia IX*.
- Ikawa, Hajime. 2014. On the status of binding and control: evidence from argument ellipsis in Japanese. In *Proceedings of the 31st West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. Robert E. Santana-LaBarge, 238–247. Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project.
- Kuroda, S.-Y. 1988. Whether We Agree or Not: A Comparative Syntax of English and Japanese. *Linguisticae Investigationes* 12, 1–47.
- Merchant, Jason. 2001. *The syntax of silence: sluicing, islands, and the theory of ellipsis*. Oxford: Oxford University Press.
- 宮島達夫, 仁田義雄 (編) .1995. 『日本語類義表現の文法 (上)』. 東京: くろしお出版.
- Murasugi, Keiko. 1991. *Noun phrases in Japanese and English: A study in syntax, learnability and acquisition*. Ph.D. dissertation, University of Connecticut, Storrs.
- Oku, Satoshi. 1998. *A theory of selection and reconstruction in the minimalist program*. Ph.D. dissertation, University of Connecticut, Storrs.
- Oku, Satoshi. 2016. A note on ellipsis-resistant constituents. *Nanzan Linguistics* 11:57–70.
- Sag, Ivan A. 1976. *Deletion and logical form*. Ph.D. dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- Saito, Mamoru. 2007. Notes on East Asian argument ellipsis. *Language Research* 43:203–227.
- Takahashi, Daiko. 2014. Argument Ellipsis, Anti-Agreement, and Scrambling. In *Japanese Syntax in Comparative Perspective*. ed. M. Saito. Oxford University Press. pp. 88–116.
- Tanaka, Hidekazu. 1997. Invisible Movement in SIK-A-NAI and the Linear Crossing Constraint. *Journal of East Asian Linguistics* 6:143–188.
- Tanaka, Hidekazu. 2008. Clausal complement ellipsis. Ms, University of York.
- 田中秀和. 2016. とりたて詞のカートグラフィー. 『岡山大学文学部紀要』 第66号:67–79.
- Williams, Edwin. 1977. Discourse and logical form. *Linguistic Inquiry* 8:101–139.